

# 1 特性関数とキュミュラント

## 1.1 準備

以下の計算等において，次の式が成り立つことを利用する．

- 期待値  $E(X)$  の性質:  $E(X + Y) = E(X) + E(Y)$ ,  $E(aX + b) = aE(X) + b$
- 指数関数のべき級数展開式:  $e^x = 1 + \frac{1}{1!}x + \frac{1}{2!}x^2 + \frac{1}{3!}x^3 + \dots$
- 確率積分:  $\int_{-\infty}^{\infty} e^{-\frac{a}{2}u^2} du = \sqrt{\frac{2\pi}{a}}$

## 1.2 特性関数 $\hat{f}(\xi)$ の定義

離散型の確率関数  $p(x)$ ，および連続型の確率密度関数  $f(x)$  のそれぞれに対し，その特性関数  $\hat{f}(\xi)$  を次の式で定義する．

$$\hat{f}(\xi) = E(e^{i\xi x}) = \begin{cases} \sum_x e^{i\xi x} \cdot p(x) & (\text{離散型}) \\ \int_{-\infty}^{\infty} e^{i\xi x} \cdot f(x) dx & (\text{連続型}) \end{cases}$$

定義式より， $\hat{f}(0) = E(e^0) = E(1) = 1$  であることに注意．

### 1.3 特性関数と $E(x^l)$ との一般的な関係

特性関数の定義式  $\hat{f}(\xi) = E(e^{i\xi x})$  において、指数関数  $e^{i\xi x}$  の部分をべき級数展開し、さらに期待値の性質を用いて変形すると次のようになる。

$$\begin{aligned}\hat{f}(\xi) &= E(e^{i\xi x}) \\ &= E\left(1 + \frac{1}{1!}(i\xi x) + \frac{1}{2!}(i\xi x)^2 + \frac{1}{3!}(i\xi x)^3 + \dots\right) \\ &= 1 + \frac{1}{1!}E(x)(i\xi) + \frac{1}{2!}E(x^2)(i\xi)^2 + \frac{1}{3!}E(x^3)(i\xi)^3 + \dots\end{aligned}\quad (1)$$

この式から分かる通り、この展開式の  $(i\xi)^l$  の係数の部分に  $E(x^l)$  が現れる。

したがって個々の確率関数や確率密度関数について、その特性関数をべき級数展開した式が具体的に求められれば、その係数を見ることにより、

$$\begin{aligned}\text{平均 } \mu &= E(x) \\ \text{分散 } \sigma^2 &= E((x - \mu)^2) = E(x^2) - \{E(x)\}^2\end{aligned}$$

などを求めることができる。

### 1.4 特性関数とキュミュラント

確率関数の特徴を知る方法としては、特性関数があれば十分である。しかしここでは、それをさらに別の形に表してみることを考える。

そこで特性関数  $\hat{f}(\xi)$  について、

- まず  $x = \exp(\log x)$  の関係を用いて1つの指数関数の形に書き直し、
- 次にその指数に現れた対数関数をべき級数展開し、
- そのときの  $(i\xi)^m$  の係数に注目する

ということを行う。すなわち、

$$\begin{aligned}\hat{f}(\xi) &= \exp\left(\log \hat{f}(\xi)\right) \\ &= \exp\left\{\frac{\kappa_1}{1!}(i\xi) + \frac{\kappa_2}{2!}(i\xi)^2 + \frac{\kappa_3}{3!}(i\xi)^3 + \dots\right\}\end{aligned}$$

となる。指数の中に  $i\xi$  に関する定数項が存在しないのは、 $\log \hat{f}(0) = \log 1 = 0$  であることによる。

このときに現れた定数  $\kappa_m$  ( $m = 1, 2, 3, \dots$ ) を  $m$  次のキュミュラントという。

## 1.5 キュミュラントと $E(x^l)$ との一般的な関係

この計算をさらに進める．具体的には，

- まず指数法則  $a^{x+y} = a^x \cdot a^y$  を用いて指数関数の積に変形し，
- 次にそれぞれの指数関数をべき級数展開する

ということを行う．すなわち，

$$\begin{aligned} \hat{f}(\xi) &= \exp\left(\frac{\kappa_1}{1!}(i\xi)\right) \cdot \exp\left(\frac{\kappa_2}{2!}(i\xi)^2\right) \cdot \exp\left(\frac{\kappa_3}{3!}(i\xi)^3\right) \cdots \\ &= \left\{1 + \frac{1}{1!} \cdot \frac{\kappa_1}{1!}(i\xi) + \frac{1}{2!} \cdot \left(\frac{\kappa_1}{1!}(i\xi)\right)^2 + \frac{1}{3!} \left(\frac{\kappa_1}{1!}(i\xi)\right)^3 + \cdots\right\} \\ &\quad \cdot \left\{1 + \frac{1}{1!} \cdot \frac{\kappa_2}{2!}(i\xi)^2 + \frac{1}{2!} \cdot \left(\frac{\kappa_2}{2!}(i\xi)^2\right)^2 + \frac{1}{3!} \left(\frac{\kappa_2}{2!}(i\xi)^2\right)^3 + \cdots\right\} \\ &\quad \cdot \left\{1 + \frac{1}{1!} \cdot \frac{\kappa_3}{3!}(i\xi)^3 + \frac{1}{2!} \cdot \left(\frac{\kappa_3}{3!}(i\xi)^3\right)^2 + \frac{1}{3!} \left(\frac{\kappa_3}{3!}(i\xi)^3\right)^3 + \cdots\right\} \cdots \quad (2) \end{aligned}$$

式 (2) を普通の意味で展開したときに  $i\xi$  の

1 次の係数  $\kappa_1$

2 次の係数  $\frac{1}{2!}(\kappa_1^2 + \kappa_2)$

3 次の係数  $\frac{1}{3!}(\kappa_1^3 + 3\kappa_1\kappa_2 + \kappa_3)$

であると計算できる．したがって (1), (2) の係数を比較して，

$$E(x) = \kappa_1$$

$$E(x^2) = \kappa_1^2 + \kappa_2$$

$$E(x^3) = \kappa_1^3 + 3\kappa_1\kappa_2 + \kappa_3$$

などが求められる．これを用いて一般に，

$$\text{平均 } \mu \equiv E(x) = \kappa_1$$

$$\text{分散 } \sigma^2 \equiv E((x - \mu)^2) = E(x^2) - \{E(x)\}^2 = \kappa_2$$

の関係があることがわかる．

## 1.6 まとめ

確率関数  $p(x)$  や確率密度関数  $f(x)$  において, その特性関数  $\hat{f}(\xi)$  を

$$\hat{f}(\xi) = E(e^{i\xi x}) = \begin{cases} \sum_x e^{i\xi x} \cdot p(x) & (\text{離散型}) \\ \int_{-\infty}^{\infty} e^{i\xi x} \cdot f(x) dx & (\text{連続型}) \end{cases}$$

によって定義するとき,  $\hat{f}(\xi)$  は次のように表せる.

- $E(x^l)$  を用いた形

$$\hat{f}(\xi) = 1 + \frac{1}{1!} E(x) (i\xi) + \frac{1}{2!} E(x^2) (i\xi)^2 + \frac{1}{3!} E(x^3) (i\xi)^3 + \dots$$

- キュミュラント  $\kappa_m$  を用いた形

$$\hat{f}(\xi) = \exp \left\{ \frac{\kappa_1}{1!} (i\xi) + \frac{\kappa_2}{2!} (i\xi)^2 + \frac{\kappa_3}{3!} (i\xi)^3 + \dots \right\}$$

特性関数を用いて, 確率(密度)関数の平均や分散が次のように求められる.

$$\text{平均 } \mu \equiv E(x) = \kappa_1$$

$$\text{分散 } \sigma^2 \equiv E((x - \mu)^2) = E(x^2) - \{E(x)\}^2 = \kappa_2$$

## 2 二項分布

### 2.1 二項分布の特性関数

二項分布  $B(n, p)$  の確率関数  $p(x)$  は,

$$p(x) = {}_n C_x \cdot p^x (1-p)^{n-x}$$

で表される。よってその特性関数  $\hat{f}(\xi)$  を定義に従って具体的に計算すると,

$$\begin{aligned}\hat{f}(\xi) &= \sum_{x=0}^n e^{i\xi x} \cdot p(x) = \sum_{x=0}^n e^{i\xi x} {}_n C_x \cdot p^x (1-p)^{n-x} \\ &= \sum_{x=0}^n {}_n C_x (pe^{i\xi})^x (1-p)^{n-x} = (1-p + pe^{i\xi})^n\end{aligned}$$

となる。

### 2.2 二項分布の $E(x^l)$

次に, これをべき級数展開する。そこで  $g(x) = (1-p + pe^x)^n$  とすると,

$$\begin{aligned}g^{(1)}(x) &= n(1-p + pe^x)^{n-1} \cdot pe^x = np(1-p + pe^x)^{n-1} e^x \\ g^{(2)}(x) &= np \{ (n-1)(1-p + pe^x)^{n-2} \cdot pe^x \cdot e^x + (1-p + pe^x)^{n-1} \cdot e^x \} \\ &= np(1-p + pe^x)^{n-2} e^x \{ (n-1)pe^x + (1-p + pe^x) \} \\ &= np(1-p + pe^x)^{n-2} e^x (1-p + npe^x)\end{aligned}$$

であるから,

$$g(0) = 1, \quad g^{(1)}(0) = np, \quad g^{(2)}(0) = np(1-p + np)$$

である。したがって

$$\begin{aligned}g(x) &= g(0) + \frac{g^{(1)}(0)}{1!}x + \frac{g^{(2)}(0)}{2!}x^2 + \dots \\ &= 1 + \frac{np}{1!}x + \frac{np(1-p + np)}{2!}x^2 + \dots\end{aligned}$$

$x = i\xi$  を代入すれば,

$$\hat{f}(\xi) = g(i\xi) = 1 + \frac{np}{1!}(i\xi) + \frac{np(1-p + np)}{2!}(i\xi)^2 + \dots$$

したがって (1) により ,

$$E(x) = np, \quad E(x^2) = np(1-p+np)$$

であり , さらにこれらを用いて

$$\begin{aligned} E((x-\mu)^2) &= E(x^2) - \{E(x)\}^2 \\ &= np(1-p+np) - (np)^2 \\ &= np\{(1-p+np) - np\} \\ &= np(1-p) \end{aligned}$$

であるから , 二項分布  $B(n, p)$  について ,

$$\text{平均 } \mu = np, \quad \text{分散 } \sigma^2 = np(1-p)$$

であると分かる .

## 2.3 二項分布とキュミュラント

次に二項分布  $B(n, p)$  のキュミュラントを計算する . 特性関数  $\hat{f}(\xi)$  について , 定義に従ってそのキュミュラントを求めることを考える .

$$\begin{aligned} \hat{f}(\xi) &= \exp(\log \hat{f}(\xi)) \\ &= \exp\{\log(1-p+pe^x)^n\} \\ &= \exp\{n \log(1-p+pe^x)\} \end{aligned}$$

ここで  $g(x) = \log(1 - p + pe^x)$  とすると,

$$g^{(1)}(x) = p \cdot \frac{e^x}{1 - p + pe^x}$$

$$g^{(2)}(x) = p \cdot \frac{e^x(1 - p + pe^x) - e^x \cdot pe^x}{(1 - p + pe^x)^2}$$

$$= p \cdot \frac{e^x(1 - p + pe^x - pe^x)}{(1 - p + pe^x)^2}$$

$$= p(1 - p) \cdot \frac{e^x}{(1 - p + pe^x)^2}$$

$$g^{(3)}(x) = p(1 - p) \cdot \frac{e^x(1 - p + pe^x)^2 - e^x \cdot 2pe^x(1 - p + pe^x)}{(1 - p + pe^x)^4}$$

$$= p(1 - p) \cdot \frac{e^x(1 - p + pe^x - 2pe^x)}{(1 - p + pe^x)^3}$$

$$= p(1 - p) \cdot \frac{e^x(1 - p - pe^x)}{(1 - p + pe^x)^3}$$

であるから,

$$g(0) = 0, \quad g^{(1)}(0) = p, \quad g^{(2)}(0) = p(1 - p), \quad g^{(3)}(0) = p(1 - p)(1 - 2p)$$

である. したがって

$$\begin{aligned} g(x) &= g(0) + \frac{g^{(1)}(0)}{1!}x + \frac{g^{(2)}(0)}{2!}x^2 + \frac{g^{(3)}(0)}{3!}x^3 + \dots \\ &= 0 + \frac{p}{1!}x + \frac{p(1 - p)}{2!}x^2 + \frac{p(1 - p)(1 - 2p)}{3!}x^3 + \dots \end{aligned}$$

これを用いて,

$$\begin{aligned} \hat{f}(\xi) &= \exp \left[ n \left\{ \frac{p}{1!} (i\xi) + \frac{p(1 - p)}{2!} (i\xi)^2 + \frac{p(1 - p)(1 - 2p)}{3!} (i\xi)^3 + \dots \right\} \right] \\ &= \exp \left\{ \frac{np}{1!} (i\xi) + \frac{np(1 - p)}{2!} (i\xi)^2 + \frac{np(1 - p)(1 - 2p)}{3!} (i\xi)^3 + \dots \right\} \end{aligned}$$

と求められる. 当然この式からも,

$$\text{平均 } \mu = \kappa_1 = np, \quad \text{分散 } \sigma^2 = \kappa_2 = np(1 - p)$$

が求められる.

## 2.4 まとめ

二項分布  $B(n, p)$  において, その特性関数  $\hat{f}(\xi)$  は次の式で表される.

- $E(x^l)$  を用いた形

$$\hat{f}(\xi) = 1 + \frac{np}{1!} (i\xi) + \frac{np(1-p+np)}{2!} (i\xi)^2 + \dots$$

- キュミュラント  $\kappa_m$  を用いた形

$$\hat{f}(\xi) = \exp \left\{ \frac{np}{1!} (i\xi) + \frac{np(1-p)}{2!} (i\xi)^2 + \frac{np(1-p)(1-2p)}{3!} (i\xi)^3 + \dots \right\}$$

二項分布  $B(n, p)$  について,

$$\text{平均 } \mu = np, \quad \text{分散 } \sigma^2 = np(1-p)$$

である.



### 3 正規分布

#### 3.1 正規分布の特性関数

正規分布  $N(\mu, \sigma^2)$  の確率密度関数は,

$$f(x) = \frac{1}{\sqrt{2\pi\sigma^2}} e^{-\frac{(x-\mu)^2}{2\sigma^2}}$$

で表される. よってその特性関数  $\hat{f}(\xi)$  を定義に従って具体的に計算すると,

$$\begin{aligned}\hat{f}(\xi) &= \int_{-\infty}^{\infty} e^{i\xi x} \cdot f(x) dx \\ &= \int_{-\infty}^{\infty} e^{i\xi x} \cdot \frac{1}{\sqrt{2\pi\sigma^2}} e^{-\frac{(x-\mu)^2}{2\sigma^2}} dx \\ &= \frac{1}{\sqrt{2\pi\sigma^2}} \int_{-\infty}^{\infty} e^{-\frac{1}{2\sigma^2}(x-\mu-\sigma^2 i\xi)^2 + \mu i\xi + \frac{1}{2}\sigma^2(i\xi)^2} dx \\ &= \frac{1}{\sqrt{2\pi\sigma^2}} e^{\mu i\xi + \frac{1}{2}\sigma^2(i\xi)^2} \int_{-\infty}^{\infty} e^{-\frac{1}{2\sigma^2}(x-\mu-\sigma^2 i\xi)^2} dx\end{aligned}$$

ただし2行目から3行目へは, 指数法則  $a^x \cdot a^y = a^{x+y}$  を用いて1つの指数関数にまとめ, その後指数を  $x$  について平方完成した.

ここで  $x - \mu - \sigma^2 i\xi = u$  と置換して積分の箇所は,

$$\int_{-\infty}^{\infty} e^{-\frac{1}{2\sigma^2}(x-\mu-\sigma^2 i\xi)^2} dx = \int_{-\infty}^{\infty} e^{-\frac{u^2}{2\sigma^2}} du = \sqrt{2\pi\sigma^2}$$

と求められる. したがって,

$$\hat{f}(\xi) = \frac{1}{\sqrt{2\pi\sigma^2}} e^{\mu i\xi + \frac{1}{2}\sigma^2(i\xi)^2} \cdot \sqrt{2\pi\sigma^2} = e^{\mu i\xi + \frac{1}{2}\sigma^2(i\xi)^2}$$

である. これはすでにキュミュラントが求められる形になっており, 実際

$$\text{平均 } \kappa_1 = \mu, \quad \text{分散 } \kappa_2 = \sigma^2$$

である. そしてさらに正規分布は, 「3次以上のキュミュラントがすべて0」という大きな特徴を持つ分布であることも分かる.

#### 3.2 二項分布の正規分布による近似

二項分布  $B(n, p)$  の特性関数をキュミュラントを用いて表した式

$$\hat{f}(\xi) = \exp \left\{ \frac{np}{1!} (i\xi) + \frac{np(1-p)}{2!} (i\xi)^2 + \frac{np(1-p)(1-2p)}{3!} (i\xi)^3 + \dots \right\}$$

において,  $p \sim \frac{1}{2}$  とすると, 3 次以上が無視できて,

$$\hat{f}(\xi) \sim \exp \left\{ \frac{np}{1!} (i\xi) + \frac{np(1-p)}{2!} (i\xi)^2 \right\}$$

と表せる. これは二項分布  $B(n, p)$  が正規分布  $N(np, np(1-p))$  に近似できることを意味する. 実用上は  $np > 5, n(1-p) > 5$  ならばこの近似を用いてよいと言われている.

### 3.3 まとめ

正規分布  $N(\mu, \sigma^2)$  において, その特性関数  $\hat{f}(\xi)$  は, キュミュラント  $\kappa_m$  を用いた次の式で表される.

$$\hat{f}(\xi) = e^{\mu i\xi + \frac{1}{2}\sigma^2(i\xi)^2}$$

正規分布は, 3 次以上のキュミュラントがすべて 0 という大きな特徴を持つ.

正規分布  $N(\mu, \sigma^2)$  について,

$$\text{平均 } \kappa_1 = \mu, \quad \text{分散 } \kappa_2 = \sigma^2$$

である.

二項分布  $B(n, p)$  は, 正規分布  $N(np, np(1-p))$  に近似できる.